

現代弓道における和装意識について

弓道部 高校三年生

平成 27 年 12 月 23 日

はじめに

自分が弓道における和装意識について発信しようと思ったきっかけがある。まず自分は弓を執っておよそ 2 年半という短い期間しか弓道と接していない。しかしその短い期間の中で、SNS（インターネットの社会交流場）を通じて袴姿（和装）について考えさせられ、今の自分の中の弓道というものの一部分を形作っている出会いをしたからである。

約 11 ヶ月前に袴姿で弓を引いている姿を載せた際に、現在自分が和装の師と仰ぐ方から反応があった。最初は驚き、戸惑いつつもお話を聞いているうちにとても感銘を受けた。

その日から袴で弓を引く意味を意識しつつ、袴を着るからには正しく着なければならぬというような想いが現れた。

その後、月刊弓道誌での連載「女子の袴についての考察」を拝読し、男の袴姿についても疑問に思う点や不安な点を再認識した。

自分は高校総体予選を前に親に相談し、援助をしてもらい、師を訪ねて岩手に参り合宿泊りがけで和装着装のマンツーマン指導をして頂いた。その後も電話やネットを通して師から和装の様々を教わるうちに、今の弓道界の和装意識の低さ、もったいなさを感じ、今後の弓道界に強く不安を抱くようになった。

それまでは、袴を着ている＝正しく着られている というのが大前提であると思っていたので、

「本当に着られているのか」「それは正しい着装なのか」

というような疑問や問題意識を持ったことはなかった。

“最初の教科書” という言葉を使わせて頂くが、袴の着方を教わる、その最初の基礎（そもそも和装とは。和装と洋装の相違とは。和装の基本とは。）が不確かなためにここまで和装意識や着装の精度が低くなってしまったと考えた。

「体配は射同様に大切であるが、伴っていない人が多い」

とよく耳にしたり、教わったりするが 「袴姿」 も 「体配」 「射術」 同様に大切なのではないだろうか。

と強く感じたのが情報発信のきっかけとなった。

自分は今高校三年生で部活を引退した身である。

現役時代に多くの大会に参加させて頂いた中で、高校生の着上りに失望したことが多々あった。強豪校と呼ばれるようなチームが、いわゆる「腰パン袴」や急いでいたのか袴紐や帯をぐちゃっと締めていたり、きもの衿の弓道着に丸首アンダーシャツや白道着に黒色のアンダーシャツなど、弓道人の和装感覚に危惧を抱かざるを得ないような状況であった。

これは指導者の責任でもあると自分は思った。

高校生は高校から弓道を始めた者がほとんどの中で、上記のように“最初の教科書”となる部活の指導者（袴の着方を教えた者）の和装意識がこの結果を招いているのではないだろうか。

指導者方には所属部員の所作礼儀や射技だけでなく、道着袴姿にも自らの指導の結果が現れていることを意識していただきたく思う。

もちろん、衣食住の衣、実生活の基本なのだから、教える側の学生、家庭教育の問題も大きいと思う。また、教科書・指導を鵜呑みにして疑わないという教える際の姿勢の問題もあると思う。形（なり）、考え方、立ち居振る舞いには個々人の素養・教養・文化観がそのまま表われるものであり、自分自身の問題と捉えずに教える側だけに理由を求める他律の姿勢は、自らの意思性、独立を放棄する愚かな在り様に他ならない。決して指導者や環境のせいにしたりせず、自分で考え実践することが重要である。自分もこれらのことを戒めとして十分に覚え、行動していきたい。

大げさかもしれないが、このままでは今高校で弓を引いている者たちが一般という場に立ち、いつの日か指導者の立場になった際、“最初の教科書”すなわち現在の教え通りに袴の着方を指導していった場合には、日本の伝統的武道の一つである弓道の文化的、美的価値が廃れていってしまうのではないかと強く危惧し文字にしようと思いついたのだ。

現在の和装意識・着装精度

先ず今の弓道家の和装に関する意識、着装実態はどの程度なのであろうか。

自分は師から理論と共に実技の面も帯の締め方、長着×角帯に始まり、長着×羽織（羽織紐の結び扱い）、長着×袴の着方など少しずつ教わっている。



※着物は結んで着る服であり、日本人は二つの結びを使い分ける。
帯結びの基本は【貝の口】。【貝の口】を通して幾何学的な結びの基本を学ぶ。
結んで着装する衣服の扱いを学び習得するのが和服の基本。
その基本を踏まえた後、袴着けが応用としてある。
このような教えを師から受けている。

◇一文字結び（袴下結び）



◇冨平結び（かんぬきたいらむすび） 師オリジナルの結び

結び目の様子、どこでどうやって固定されているのかが他の結び方と比べて
わかりづらく手品のようにも見えることから「不思議結び」の名も



◇小太鼓結び（女半幅帯）＝冨平結び

結びとは、着物を着るとは、という意味で女半幅帯での修行も



それらを教わる中で単に色柄の美しさだけでなく、内面にある知的で文化的な
美も兼ね備えているのが和装の大きなポイントだと理解するようになった。

日本人が昔から着てきた“和服”というもの。

和服を着るという中に込められた合理的な工夫、着物の仕立て。

和装の勉強をするようになってから日本人は非常に繊細で、美しく、言ってしまえば頭の良い民族であることを思い知らされている日々である。

例として袴紐の一字結び。

今日、袴を着る武道家のほとんどは結びきりで後ろ紐を結び上げている印象がある。

武道家に限らず、いわゆる和装家、普段着として和服を着る方々も結びきりをする事が多いのではないだろうか。

決して結びきりが悪い結び方ということではなく、それも装い分け、結び分けという中で和装文化の一つであることは間違いない。

しかし何故一字結び、十文字結びで袴紐を結ぶ場合が少ないのであろうか。

「一字結び、十文字結びは冠婚葬祭（洋服で言うスーツを着るような場）等で結ぶものだから」

と耳にしたことがあるが、そんなことは一切ないと師から教わる中でわかった。このような説は、結び方・それぞれの結びの意味特徴・結び分けを知らない、普段から和装をしないような方々によって言われ始めたというのが経緯ではないだろうか。

何故自分がこのような主張をしているかという、一字結び、十文字結びほど理にかなった結びはないと強く認識しているからだ。

何が理にかなった結びかという、*“汚いシワ”* がつかないという部分にある。

実際に師に教わった方法で一字結びを結んでみてとても驚いた。

結びきりでは袴紐にぐちゃっとしたシワがついていたのに対して、師の一字結びでは直線的な折り目以外ついていなかった。十文字結びでも同様の結果であり、こんな素晴らしい結び方があったのかと心底驚いたのを覚えている。

結びきりでもある程度は綺麗に結べると言われるが、一字結び・十文字結びには敵わなかった。

※日本人は二つの結びを使い分ける。端的に *ぐちゃ結び* / *折り紙的結び*。

結び切りは結び理論的にぐちゃ結び分類となり（縦を平らかに整えようとも）、以下のような一字結び・十文字結びは折り紙的結び分類となる。



※日本人の結びの特長、折り紙的幾何学結びの合理性、美しさがより際立つ
袴紐十文字結び

実際、弓道界でも、浦上栄範士十段の袴紐十文字結び姿、
鴨川信之範士十段の袴紐一文字結び姿を複数確認することが出来る。
こうした先生方の先例、範示しを吟味し参考にすることが大切になってくると
思う。



※師の縞平袴を拝借しての袴着付け、袴紐十文字結び。
岩手袴合宿で。
(長着は祖父から譲られたもの)

自分の襦、弓などの弓具が汚れても良いという弓引きはいないだろう。
これは弓引きに留まらず、自身の道具、服は大事に扱うはずだ。
では袴は良いのか。帯は良いのか。
しっかりと稽古後に袴を丁寧にたたむ方々が多いのがよく物語っていると思う。
余計なシワ、汚れをつけたくない為に丁寧に、大切に扱っているからだ。
さらに誂えた正絹の縞平袴などならば尚さら几帳面に扱うだろう。
しかし、残念な事に自分で“不要な”シワをつけてしまっている方が多いのが
現状であると目にしてきた中で思う。

折り紙をぐちゃぐちゃに折る人はいないだろう。

「和装は折り紙である」

と師から教わった。

幾何学的でありながらも仕上がりの美しさが素晴らしい。

そんな折り紙的な要素を伴っているのが着物、和の結び、装いである。



※師の帯結びのお手本。折り紙的幾何学結びの精度、応用バリエーション。

これらを前提に考えた場合、弓道界の和装意識、着装実態が今ひとつであることは否定できない。

自分は部活に所属していたと上記したが、一般の審査会場を訪れたり、幸いにも支部に入れて頂き一般の方々と稽古したりと学生ばかりではなく、比較的広い視点で和装意識、着装実態を目にしてきた。

そう見てきた中でやはり美しく着られている方は少数派と感じた。

基本と応用、基本が大切。とよく言われる。何ごとにつけその通りと強く思う。しかしながら実際問題、和装の世界では袴は応用だと理解されている方が少ないのが正直なところであった。

和装の世界では基本は長着×帯であり、応用としての袴である。

弓道に言い換えると

「八節の意味を理解せず的に前で弓を引き、審査に出ている」

というような感想を持ってしまった。

“基本無き応用” が今日の弓道家の多くが持つ和装理解として一般化してしまっている印象だ。

そして実際の和装意識・着想精度にもそれが現れているように思う。

袴の基本3点について

袴を着る際に大切なポイント “襷” “裾” “折り目（畳シワ）” の3つを紹介させて頂きたい。

“襷” これは袴を着る際、射の最中に基準線となる。

特に三の襷。袴の中心線であり体の中心線と合わせることで、中心線が目で見とれるようになる。

ヘソの下に三の襷がくるように、そして裾まで三の襷が垂直で股が割れないように意識し調整しながら着ることで袴の着上がりもより美しく、加えて射を良くしていく上で、ひとつのものさしの役割もしてくれる。

この意味で、袴前紐を上下二段で段差をつけて取り回し、下段で襷を押さえ整える上下二段締めは有効となる。重い袴を、重力に逆らって着ける、その際の応力（張力）分散という意味からも理にかなっている。浅い段差で取り回し、袴を着けると、それだけ狭い範囲に張力が集中し、余計なキツさを生じさせることになるとともに襷制御も不安定となるのである。

三重十文字が残身に向かうにつれてブレてきてしまう人がいたとしよう。

三重十文字がブレてしまうのはわかるが、どの程度ブレて、どこから大きくブレてしまうのか分からずに悩んでいる。

しかし袴の三の襷をしっかりと裾まで体の中心線と合わせることで、どこでどの程度ブレるかはわかるだろう。

もちろん袴があるのは腰周りから下なわけで肩線のブレなどはわからないが…それでも射を良くする上では十分な役割を果たしてくれる。

最も襷の役割がわかりやすいのは足踏みをした時だ。

襷の開き具合でどちらの足が開き過ぎだとか、開き足りない場合はひと目で分かってしまう。

このような役割を果たすのが一つ目の “襷” である。

二つ目は “裾”

裾を擦らないようにとか、裾はどの辺までが望ましいというような話は講習会やそれ以外の場でもよく耳にし、常識になっている思う。

裾を擦っていけないことは多くの方が理解している中、実際には擦っている方をちらほら見かける。

特に高校生、大学生に限ってはちらほらではなく、かなりの方が裾を擦って弓を引いている。

また、天皇盃の決勝（予選：採点審査の後）でもそうした姿を見かける。

これはとても深刻な問題ではないだろうか。

裾を擦って弓を引いている姿は美しくはなく、少し強い言い方をすればみっともない。

そもそも袴は足を開く動作（弓道でいう足踏み）をしても美しい形（なり）になることが想定され作られている。

「切り上げ」

この部分、寸法名称がそうだ。

足を開いた際に、裾が円弧を描き中心下がりとなるのではなく水平的になるように仕立てる（袴を平置きした際に階段状に中心部を上げる）日本人の知恵である。

袴の仕立てを学ぶと、袴は、単に機能的な面からだけではなく、高度な美意識の面からも、弓を引くこと、弓を引いた姿、その際の極上の美を想定して作られていることが実感される。弓と袴の相乗関係を強く感じる。

単に裾を擦る擦らないだけでなく、足を閉じている時だけでなく、開いていても裾が擦らずに水平的になっている着上がりやを弓道人として是非とも心がけて頂きたいと思う。また、そうした裾制御の感覚、仕立て販売が普及して欲しいと思う。

そしてそれを新しく弓を執り、袴を着る方たちに説明し伝授していく事こそこれからの目指すべきひとつの姿だと私は考えている。



※織+仕立て+結び=三位一体の高度な統合により装う（完成する）和装。

洋服は服に求める。和装は人に求める。

洋装と和装の文化的な相違を踏まえ、服になにを求められているのかを感じ考え装うことが重要。

との師の教え。

（師の縞平袴は弓道での使用を前提とした仕立てではなく、一般礼装用途の仕立てで切り上げが浅めになっているとのこと。

上画像では、私自身の伏す胴により、尚さら前中心が下がり気味となっている面がある。

各人毎の足の開き具合や胴造りなども勘案して切り上げ寸法を調整することが重要とのこと。）

三つ目のポイントは “折り目（畳みシワ）”

「折り目正しく」という言葉は袴でも用いることができる。

ついていて良い折シワと悪い折シワ。

ついて良い折シワは横方向につく二本のシワだけである。

そして袴を畳んだ際につくこの二本のシワ以外についてはいけないのだ。

一般的に弓具店で売られている袴は本式の馬乗袴とは仕立てが違っている場合が多く、売られている状態で既に 縦シワ が入っていたりする場合も少なくない。

持ち運びが不便であるから袴を小さく畳んでいる方は多いように思う。

重複してしまうが、誂えた縞平袴に無駄なシワをつける方はいない。

誂えた襪にわざわざ傷をつける弓引きはいないだろう。

誂えでなくとも、自分の道具に傷や汚れはつけたくはない。

袴でも同じはずだ。

では無駄なシワをつけずに小さく袴を畳むにはどうしたら良いか。
その方法をここで大まかに紹介させて頂く。

◇まずは袴を丁寧に畳み、道着や帯を乗せる



◇帯や道着の線に合わせて内側に折る

ここで大事なことは袴の縦方向に関して鋭角に折り曲げ畳まないこと、すなわち折り曲げる部分に厚みをもたせることであり、厚みを作る為に道着や帯を乗せている。

下の写真のような 厚み が袴にシワがつくことを防いでくれるのだ。



◇あとは袴、道着を覆うように風呂敷を結ぶ

たったこれだけの手順で畳むだけで、上の荷物の圧力がかかっても悪いシワはつかず、それでいて持ち運びしやすいのだ。

簡単に説明したが、工夫一つで余計なシワはつけなくて済むということをお伝えしたい。

三つ、袴を着る際のポイントを説明させて頂いたが、この三つをしっかりと実践するだけでも着上がりの美しさが変わってくる。

そしてこれら三つのポイントが弓引きの間で基本、常識となることを願う。

(例として紹介させて頂くが、現在の天皇盃出場者では、広島県代表の正法地清先生が、上下二段の前紐取り回しによる腰まわりの安定感、襷の制御、裾線の「切り上げ」による水平的制御、畳みシワの面での折り目正しさなど、上記三点を踏まえた精度の高い袴着けという意味で大いに参考、お手本になるものと拝見している。他に土佐正明先生等も好例を示して下さいと拝見。)

常識の差

弓を引く際に着る着物と、普段着や冠婚葬祭に着る着物の仕立て、着方に本来大きな差はない。

だが、「膝丈の着物」「肌脱ぎ用の長着」「仕立ての違う袴」「角帯と呼べない“角帯”（弓道初心者用で一般的な黒の道着帯）」など、呉服店では売られていないような着物を弓具店で目にする。

弓道用としてニーズが有り、その方が使い勝手がいいので売られているのだろう。

しかし、弓道用として変えるべきものとそうでないもの、特化する部分とそうでない部分があるように思う。

何から何まで弓道用として使い勝手がいいからと変えていってしまったら、リアリティのある文化的な意味での和装と呼べるのだろうか。

膝丈の着物を例にすると、時間がない場合や遠くに赴く際に荷物のかさばりを抑える為に用いるのは仕方がなく、その方が勝手も効率もいい。

しかし、時間がある場合や無理なく持ち運べる距離であれば通常の着物、まさに長着を着るべきではないのだろうか。

裾の端折りを行えば何ら問題はないし、和装の観点から見ても本来的な着装といえる。



※袴下の長着端折り。

和装は一つの着物を用途に応じて着分けられる応用性（フレキシビリティ）が大きな特徴。

端折る際にも、折り紙的な扱いで無用なシワを付けない丁寧さが重要。

モノはシンプルに、人に応用を求め使い分け使いこなすのが和文化的の本質。との師の教え。

見えない細部まで美しさや用途後の支障なきを求めるのが和文化的かと。

それらを変えるべきか否かの判断はこれからの弓道界全体の和装に対する意識で大きく変わってくるものと思う。伝統文化にかなった、そして理にかなった和装捉えにより、弓道界のより良い変化、発展を望む。

その為に、射技指導や体配の指導だけでなく、着物の着方も含めしっかりと下の世代に伝えていくべきだと、そう自分は強く感じている。

和装論、文化論からして不適切と思われることを常識としている方が多い今の現状を維持していくのは日本文化が廃れる原因につながりかねない。

この文章を目にしたことをきっかけに、自分の和装を文化意識・着装精度という観点から見つめ直す方が一人でも増え、今後の弓道界のさらなる発展に繋がることを切に願う。



※羽織袴

弓道人は高段位になるまでは道着だけを着ていれば良い、というものではないと実感。

着物とは、和装とは、和文化とは、という基礎的踏まえ、解釈がないと道着袴も在るべきようには着られない。

袴を着て弓道を行う意味

弓道で袴を着る意味とは、「武道であるから」 「日本の伝統的な文化であるから」

このような意見をお持ちの方がいる。

しかし、それをしっかりと実践できているだろうか。

弓道は袴の美しさがよく活きる競技だと考えている。

襦 裾 折り目（畳シワ） の事を書かせて頂いたが、弓道は射手の和装意識・着装精度が入場から退場までに如実に表現される競技だ。

動く時（体配） 止まるとき時（停止体） 座る時（坐した姿勢） 等
審査であれば10分程度で様々な視点から袴姿の美しさを認識できる。
素晴らしい競技だが、一方で怖い競技である。

和装意識 という言葉を使わせて頂いているが、これが弱いと 「着られない人」というのが10分という短い時間で露呈してしまうからだ。

そうになってしまうと、いくら良い弓を引き、良い体配をしても袴については「着られない人」 だと見られてしまう。



※袴下角帯一文字結びに。脇開き下部がたるまぬよう。

自分の場合は尻高体型なので、袴寸法の面で「前後差」を大き目に取り後ろが上がり過ぎないように調整をした。（右写真：相引が垂直的、尚かつ裾線が前下がり後ろ上がりになるよう）

脇開きはポケットではない。

講習会では射技指導や体配指導はあるが 袴の指導 はほとんど行われていない印象だ。

心技体が大切と言うが、袴を着る技術、袴を着る心は大事ではないのだろうか、と若いながら思っている。

実際、美しい袴姿をされている先生方は多くおられる。

美しい袴姿の方々が引く弓はより深く見入ってしまう。

そういう方々がいるのであるから、その技術を射技同様多くの方に伝える場が今以上に増えると弓道界のより一層の発展につながると確信している。

袴を着て弓を引くことはいわば“作品、奏で（かなで）”であり、“文化”であると思う。まさに真善美である。

これら全てを含めての正射であり目標だ。

それをしっかりと体現できるような、「奏弓」「奏射」（※師独自の言葉：弓による射奏で）という域で弓を引く、そんな射手が今以上に増えることを強く願う。



※より一層の弓道界の発展、「以射養徳」の精神。

弓を通して和の文化、和の心を学ぶ、和の頂きに通じる道程、それが弓道と。

平成 28 年 2 月 2 日 修正

弓道部 高校三年生